

吉利支丹心得書の仮名の用字法*

鄭 炫 赫**

本稿は、キリシタン文字社会の特徴をさぐる意味で、キリシタン文献の一つである写本『吉利支丹心得書』の仮名の用字法の特徴を考察した。それをまとめると以下ようになる。

まず、字体の面からみると、『吉利支丹心得書』の仮名字体は75で、和字文のなかでも字体がかなり収斂された馬琴本群(平均82.7字)と草双紙類(平均70.6字)の間に属することが分かった。

次に、仮名字母の面からみると、『吉利支丹心得書』は68字母で、キリシタン版国字本の中でもっとも収斂された前期本の字母数に近かった。また、キリシタン版国字本の共通字母と比較しても、一部の字母を除いて多くの部分が一致している傾向をみせていた。

仮名の用字法として位置による使い分けをみると、語頭専用として〈加〉〈志〉〈多2〉〈遍〉〈止1〉が、非語頭専用として〈し〉〈多1〉〈ハ〉〈へ〉が、助詞専用として〈止2〉〈毛1〉が使われていた。さらに、仮名「は」は、ワ音を主に〈ハ〉で一部〈盤〉、ハ音を主に〈者〉で一部〈は〉、バ音を主に〈者〉と〈ハ〉で一部〈は〉、バ音を〈者〉にする音による仮名の使い分けをしていた。このような用字法は、一部を除いて、近世の仮名草子整版本や『落葉集』の用字法と多くの部分で似ていた。すなわち、写本である『吉利支丹心得書』の仮名の用字法が、当時特別な用字法ではなかったということである。

キーワード：吉利支丹心得書、キリシタン版国字本、仮名字母、
仮名字体、用字法

1. はじめに

本稿は、キリシタン文献の一つである写本『吉利支丹心得書』の仮名の用字法を明確にすることを目的とする。キリシタン版国字本の仮名の用法については、すでに拙稿(2007: 206)を通して、「キリシタ

* 本研究は2013年度サイバー韓国外国語大学校の学内学術研究費の支援によって行われたものである。

** サイバー韓国外国語大学校助教授、日本語学(日本語史)

ン版国字本の共通する字母と字体は、単純で書きやすい字母と字体」を使っていたことを明確にしている。また、『どちりいなきりしたん(バチカン本)・から『どちりなきりしたん(カサナテンセ本)・になるにつれて、位置のみならず、入声音や促音、字音語、本語¹⁾などに一定の仮名を使う傾向があることを確認している。これらの傾向に対して、同じジャンルで時期もそれほど変わらない写本²⁾は、どういう傾向をみせているかを明確にすることで、キリシタンの仮名文字社会の特徴がより明確になることが期待される。

『吉利支丹心得書』は、末尾に「寛永五年正月日書之者也」と書いてあって、内容は教理書である「どちりなきりしたん」と一致するところが多い文献である。この文献の特徴について、福島邦道(1973:68)は次のように述べている。

この書名は仮題であり、内容はドチリナ・キリシタンと一致するところが多い。上下二巻あり、末尾に寛永五年に書いたとある。錯簡も多く、読みにくいが、姉崎博士の研究を経て、海老沢博士の研究により大成された。(中略)本書は美しい平仮名で書かれているが、読みにくく、錯簡も多くある。語学的には、ジヂズツやオ段長音の開合が乱れている。

上記の記述のように錯簡の多いところは、海老沢有道(1993)を参考にして問題を解決した。本稿で扱う資料は、水戸藩で蒐集され、現在水府明德会彰考館に蔵されたもので、以下の複製本を使う。

珍書大観 吉利支丹叢書(1928)『吉利支丹心得書 上冊・大阪毎日新聞社

珍書大観 吉利支丹叢書(1928)『吉利支丹心得書 下冊・大阪毎日新聞社

1) ここで本語とは、『吉利支丹心得書』に宗教用語として使われた平仮名表記の外国語をさす。

2) 『吉利支丹心得書』の末尾の奥書の寛永五年に従うと、この文献は1628年書写となる文献である。

さらに、これらの複製本の解読のために以下の文献を参考にした。

海老沢有道校註(1993)『吉利支丹心得書』『キリシタン研究』
第30輯・教文館

『吉利支丹心得書』の複製本は、上册1丁ー41丁、下冊42丁ー72丁となっているが、本稿では、1丁表から21丁表までを考察の範囲とした。ただし、仮名字体の数を調査するにあたっては1丁から72丁までを範囲として調べた。以下、字体を示す際、現代の一般的な字体に形の近いものはそれで代用し、それ以外のものについては、まず現代通用のものと字母が異なるものは字母となった漢字で示した。また、同字母で字体が異なるものは、漢字に1、2の番号をつけて表した。実際の仮名字体は、後掲の「吉利支丹心得書の仮名字体表」を参考にしてほしい。以下、字体は〈 〉の中に示す。

2. 仮名字体と字母

本稿で仮名字体を選定する時、清音、濁音、半濁音の区別は無視して行った。このように抽出された仮名字体数は75(69字母)である。以下にそれを示す。

〈あ〉〈い〉〈う〉〈え〉〈於1〉〈於2〉
 〈可〉〈加〉〈き〉〈く〉〈具〉〈け〉〈こ〉
 〈さ〉〈志〉〈し〉〈す〉〈春〉〈須〉〈せ〉〈そ〉
 〈た〉〈多1〉〈多2〉〈ち〉〈つ〉〈徒〉〈て〉〈止1〉〈止2〉
 〈な〉〈爾1〉〈爾2〉〈に〉〈丹〉〈ぬ〉〈年〉〈祢〉〈乃1〉
 〈乃2〉〈能〉
 〈者〉〈ハ〉〈は〉〈盤〉〈ひ〉〈ふ〉〈へ〉〈遍〉〈ほ〉〈本〉
 〈ま〉〈満〉〈三〉〈み〉〈む〉〈め〉〈毛1〉〈毛2〉
 〈や〉〈ゆ〉〈よ〉
 〈ら〉〈り〉〈里〉〈る〉〈れ〉〈連〉〈ろ〉
 〈わ〉〈王〉〈ゐ〉〈ゑ〉〈を〉〈ん〉

これを浜田啓介(1979)の調査と比較すると、『吉利支丹心得書・の字体(75字)は、馬琴本群(平均82.7字)と草双紙類(平均70.6字)の間に属する。この結果は、浜田啓介(1979)でもっとも収斂された後期浄瑠璃本の平均字体数65.1字よりは多いが、かなり収斂されている字体であったと判断される。

『吉利支丹心得書・を字母の面で調査すると69字母である。これをキリシタン版国字本の使用字母と比較すると、前期本に該当する『どちらいなきりしたん(バチカン本)・67字母、『ばうちずもの授けやう・68字母と辞書である『落葉集・70字母の間に位置する。この二つの文献の仮名字母数がキリシタン版国字本の中で一番少ないことをみると、『吉利支丹心得書・の字母数もかなり少ない方であったことが分かる。

実際、『吉利支丹心得書・の69字母の特徴をみるために、キリシタン版国字本で共通する63字母と比較すると、『吉利支丹心得書・にのみ使われる字母は、〈具〉〈須〉〈丹〉〈年〉〈能〉〈盤〉〈保〉〈王〉で、キリシタン版国字本の共通字母にのみ使われた字母は、〈阿〉〈古〉〈流〉である。これらの字母を除くと、両方で共通する字母は60字で、86.9%(60/69)の一致率をみせる。

『吉利支丹心得書・にのみ使われる字母〈具〉〈須〉〈丹〉〈年〉〈能〉〈盤〉〈保〉〈王〉を、キリシタン版国字本の中でもっとも字母数の多い『どちらいなきりしたん(カサナテンセ本)・と比較してみると、〈須〉〈丹〉〈年〉は、『どちらいなきりしたん(カサナテンセ本)・にも使われていなく、『吉利支丹心得書・の特徴的な字母使用であったと言える。

3. 仮名の用字法

『吉利支丹心得書・の仮名の用字法は、75の全字体を調査したのではなく、先行研究でよくいわれる仮名字体を選んで考察した³⁾。その

3) 本稿で調査した全文字数は1551字である。ただし、仮名「は」の例は、鄭炫赫(1998)の調査を用いたので、全範囲に現れる例である。

中で、異字母異字体の場合は、〈加〉と〈可〉、〈志〉と〈し〉、〈た〉と〈多1〉と〈多2〉⁴⁾、〈徒〉と〈つ〉、〈遍〉と〈へ〉、〈三〉と〈み〉を選び、同字母異字体の場合は、〈於1〉と〈於2〉、〈止1〉と〈止2〉、〈毛1〉と〈毛2〉を選んだ。以下、位置による使い分けを考察する時があるが、その時、接頭語「御」は語頭、非語頭の判定に関係しないことにした。また、複合語は単純語に分け、字音語は字音形態素に分けて語頭、非語頭を判定した。さらに、語種別には、和語、漢語、本語に分類して示す。

3. 1 異字母異字体の場合

3. 1. 1 〈加〉と〈可〉

『吉利支丹心得書・に使われた仮名「カ」の字体〈加〉〈可〉を位置別に分類すると以下のような結果が出る。

〈加〉39例(語頭33例、非語頭5例、助詞1例)

〈可〉168例(語頭43例、非語頭105例、助詞20例)

〈加〉は、非語頭に和語2例(「べ〈加〉らず」「ゆる〈加〉せ」と本語3例(「かとうり〈加〉」「ふる〈加〉とうりよ」「ゑう〈加〉りすちや」)が使われるものの、ほぼ語頭使用である。久保田篤(1994)調査の近世整版本での〈加〉も語頭に主に使われるという。今野真二(1996)調査の『落葉集・でも同一の傾向である。

〈可〉は、168例があって、語頭に43例、非語頭に105例、助詞に20例が使われ、位置による使い分けは見られない。しかし、助詞「が」の場合、〈可〉のみが使われ、〈可〉は助詞専用と言える。助詞〈か〉の場合、「あたる〈加〉」(20裏2行)、「成奉る〈可〉」(15裏9行)で、〈加〉〈可〉の字体が両方使われている。

4) 〈た〉と〈多1〉と〈多2〉は、異字母異字体にも、同字母異字体にもなるが、ここでは便宜上異字母異字体に入れて考察した。

3. 1. 2 〈志〉と〈し〉

『吉利支丹心得書・に使われた仮名「し」の字体〈志〉〈し〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈志〉141例(語頭80例、非語頭61例)
 〈し〉177例(語頭23例、非語頭154例)

〈志〉は、普段語頭に使われると言われるが、上記の例の分布をみると、位置による使い分けがないように見える。しかし、語種別に例をみると明確に位置による使い分けが確認できる。以下、〈志〉の例を位置とともに語種別に分類すると、結果は以下のとおりである。

〈志〉の語頭の例

和語一「たり〈志〉」⁵⁾1例、「見〈志〉り」⁶⁾2例、「〈志〉きりに」1例、「〈志〉たがい」1例、「〈志〉たかひ」1例、「〈志〉な」1例、「〈志〉なゝゝ」1例、「〈志〉めし」1例、「〈志〉らせ」1例、「〈志〉りて」1例、「〈志〉る」2例、「〈志〉るし」2例、「〈志〉わざ」1例、「進退〈志〉」⁷⁾1例、「たい〈志〉」2例
 漢語一「御〈志〉かい」1例、「御〈志〉きさう」1例、「御〈志〉やめん」1例、「御〈志〉んか」2例、「いん〈志〉」⁸⁾1例、「おん〈志〉き」1例、「〈志〉玉ふ」1例、「〈志〉きく志ん」1例、「〈志〉さい」3例、「〈志〉ゝ玉ひて」1例、「〈志〉ゝ玉ふ」2例、「〈志〉ゝ玉へ」1例、「〈志〉ゝたる」2例、「〈志〉する」6例、「〈志〉」⁹⁾せつ」1例、「〈志〉やへつ」1例、「〈志〉ゆこ」1例、「〈志〉ゆご」1例、「〈志〉ゆし」1例、「〈志〉よき」1例、「〈志〉」¹⁰⁾よぜん」1例、「〈志〉んかう」1例、「〈志〉んじ」10例、「〈志〉んじん」6例、「〈志〉んずる」2例、「ぞん〈志〉やう」1例、「ちく志よく」2例、「ちく志」¹¹⁾よく」1例、「にく

5) 「御てきたりしともがらを」(18表6行)で、「たりし」を二つの助動詞の結合とみなし、「し」を語頭扱いした。

6) 「見しり」は「見」と「しり」の複合語とみなし、「し」部分を語頭扱いした。

7) 「進退し」の「し」は漢語の後ろにつくサ行変格動詞で、単純固有語とは性格が異なる面もあるが、本稿では語頭扱いすることにした。

〈志〉ん」1例

本語一「〈志〉ゆひりよ」4例、「〈志〉ゆいそせらる」1例

〈志〉の非語頭の例

和語一「御ゆる〈志〉」1例、「うつ〈志〉」1例、「〈志〉め〈志〉」1例、

「や〈志〉なひ」1例、「あるへ〈志〉」1例

本語一「あん〈志〉よ」5例、「いんするせん〈志〉や」2例、「いん
つるせん〈志〉や」1例、「おら〈志〉よ」23例、「きり〈志〉
たん」15例、「きり志と」2例、「こるぼみ〈志〉ちこ」1
例、「さるへれ〈志〉ひや」1例、「さんたゑけれ〈志〉や」2
例、「さんちい〈志〉ま」1例、「ぢ〈志〉ひりなわ」1例、「ぼ
ん〈志〉よびらと」1例、「ゑけれ〈志〉や」1例

上記の例をみると、〈志〉の語頭の場合、和語と漢語が大部分を占め、本語は5例のみであるが、〈志〉の非語頭の場合、和語は5例のみで、本語が56例も占める。本来、字体の位置による使い分けは、和字文にのみ通用されたもので、「本語」は適用されないのが普通である。そのため、〈志〉の位置による使い分けを正確にみるためには、本語の例を除いて考えるべきである。〈志〉の使用を本語を除いて計算すると、語頭75例、非語頭5例で〈志〉がほぼ語頭専用に使われたことが分かる。

〈し〉の例は、語頭に比べ非語頭に圧倒的多く使われている。〈し〉の語頭と非語頭の例を示すと結果は以下のとおりである。

〈し〉の語頭の例

和語一「〜〈し〉て」8例、「しゆ〈し〉〜」1例、「〈志〉ん〈し〉」奉る」
1例、「たい〈し〉て」1例、「たつ〈し〉て」2例、「まち奉れ
〈し〉」1例、「御らん〈し〉」1例

漢語一「御なひ〈し〉やう」1例、「御ない〈し〉やう」1例、「かう
〈し〉」やう」1例、「〈志〉ん〈し〉」ん」6例、「たつ〈し〉や
う」1例

〈し〉の非語頭の例

和語一「同〈し〉」1例、「同〈し〉き」1例、「奉り〈し〉」1例、「奉り

かくし」1例、「思出くし」2例、「御やくし」なひ」1例、
 「御ゆるくし」4例、「ゆるくし」15例、「玉ひくし」1例、
 「有まくし」き」1例、「下されかくし」1例、「あくし」き」6
 例、「玉ふへくし」1例、「あらはくし」1例、「あらわくし」
 2例、「いにくし」へ」1例、「うくし」なふ」1例、「うたがい
 なくし」1例、「おかずまくし」"い」1例、「おかせくし」3
 例、「おこくし」1例、「おくし」へ」5例、「おつまくし」"き
 1例、「をとくし」1例、「おほくし」1例、「おほくし」つけ
 1例、「おほくし」めす」2例、「おほくし」めす」1例、「かし
 ら」1例、「かなくし」む」1例、「くるくし」み」7例、「さ
 くし」たまふ」1例、「く志」るくし」2例、「く志」んくし」"」7
 例、「く志」んくし」2例、「すこくし」1例、「たいくし」て
 6例、「たいくし」1例、「たゞくし」1例、「たのくし」み」2
 例、「つくくし」1例、「なくくし」て」"なくし」3例、「のか
 くし」3例、「のがくし」2例、「はくし」むる」1例、「は
 くし」め」2例、「はなくし」1例、「ほとこくし」1例、「ま
 くし」まさ」2例、「まくし」ませ」2例、「まくし」ます」7例、
 「むかくし」2例、「むくいとくし」て」1例、「めくし」～」4
 例、「もつへくし」1例

本語一「いんつるせんくし」や」6例、「いんするせんくし」や」3
 例、「さるへれくし」ひな」1例、「さんたゑけれくし」や」9
 例、「さんたゑけれくし」"や」1例、「せくじ」ゆん」1例、
 「へにてんくし」や」1例、「へれにいくし」ま」1例、「ゑけ
 れくし」や」4例、「ゑけれくし」"や」1例

〈し〉の語頭の例をみると、和語は、サ変動詞の連用形「し」の形、助動詞「し」の例であり、漢語は、後半部の字音形態素の例である。つまり、両方とも純粋に語頭の位置とは断言できない例であるということである。これに比べて、〈し〉の非語頭の和語の例は、純粋に非語頭の例が大部分であることが分かる。この結果に基づいて考えるなら、〈し〉は純粋には非語頭に主に使われる字体であったと言えるだろう。

〈志〉は語頭、〈し〉は非語頭に用いられる傾向は、久保田篤(1994)調査の近世整版本でも見られる。

3. 1. 3 〈た〉と〈多1〉と〈多2〉

『吉利支丹心得書・』に使われた仮名「た」の字体〈た〉〈多1〉〈多2〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈た〉113例(語頭63例、非語頭50例)

〈多1〉51例(語頭2例、非語頭49例)

〈多2〉70例(語頭52例、非語頭16例、判断不可能2例)

〈た〉使用の例をみると、語頭、非語頭の使い分けが見られない。〈多1〉は、語頭の2例(「しく多1る」「まちいられ多1る」)のみで、ほぼ非語頭専用である。〈多2〉は、単純に例の分布をみると、語頭専用と言えないが、非語頭の例が、14例(「さん多2まりや」3例、「さん多2ゑけれしや」9例、「ちりん多2あで」1例、「てん多2さん」1例)も本語である。この例を除くと、非語頭には2例(「あく多2り」2例)と判断不可能の「たすけさせられ多2」1例、「なされ多2」1例のみが残る。この結果から考えて〈多2〉はほぼ語頭専用であったと言える。

今野真二(1996)では、『落葉集・』の場合、〈た〉語頭、〈多2〉非語頭という傾向が見られるというが、『吉利支丹心得書・』は〈多2〉語頭、〈多1〉非語頭で、『落葉集・』と傾向が異なる。

また、久保田篤(1994)調査の近世整版本では「た」「多2」の使い分けが見られないという傾向であるが、『吉利支丹心得書・』でも同一の傾向であったと言える。

3. 1. 4 〈徒〉と〈つ〉

『吉利支丹心得書・』に使われた仮名「つ」の字体〈徒〉〈つ〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈徒〉29例(語頭18例、非語頭11例)

〈つ〉79例(語頭14例、非語頭65例)

〈徒〉の例を調べると、語頭の例が若干多いのみで位置による使い分けは見られない。〈つ〉の例も非語頭が優勢であるが、位置による使い分けは見られない。久保田篤(1994)調査の近世整版本では、〈徒〉は語頭に、〈つ〉は両方に使われるというが、『吉利支丹心得書・は』は、両字体ともに位置による使い分けが認められなく、傾向が異なる。

3. 1. 5 〈者〉と〈ハ〉と〈は〉と〈盤〉

『吉利支丹心得書・』に使われた仮名「は」の字体〈者〉〈ハ〉〈は〉〈盤〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈者〉342例(語頭161例、非語頭80例、助詞101例)

〈ハ〉526例(語頭0例、非語頭9例、助詞517例)

〈は〉19例(語頭5例、非語頭11例、助詞3例)

〈盤〉4例(語頭0例、非語頭0例、助詞4例)

上記の字体の中で、〈ハ〉は語頭には使われず、非語頭および助詞にのみ使われ、非語頭専用である。また、〈ハ〉〈盤〉はともに助詞「は」の専用仮名である。久保田篤(1994)調査の近世整版本でも、〈ハ〉が非語頭に、〈盤〉が助詞専用である点は共通する。しかし、〈は〉が近世整版本で助詞専用であることは『吉利支丹心得書・』の傾向とは異なる。

特に仮名「は」の字体〈者〉〈ハ〉〈は〉〈盤〉は、音による使い分けをするという先行研究で言われてきたが、『吉利支丹心得書・』でも似ている傾向を見せる。まず、ワ音の字体の使い分けは、以下のような結果を見せる。

ワ音：非語頭一〈ハ〉9例

助詞一〈者〉2例、〈ハ〉482例、〈盤〉4例

ワ音の場合、〈は〉は1例も使われていない。また、〈者〉は助詞として「其子細〈者〉」(41表11行)、「其〈者〉」のみ使われ、ほとんど使われていない。助詞「は」は〈ハ〉または〈盤〉を主に使っている。今野真二

(1995)調査の『落葉集・でも、助詞「は」に〈ハ〉を使っていることは同じである。

ハ音の字体の使い分けは調べると、結果は以下ようになる。

ハ音：語頭一〈者〉62例、〈は〉3例
非語頭一〈者〉13例、〈は〉1例

ハ音は、上記の結果のように〈者〉と〈は〉のみが使われる。ハ音は、語頭と非語頭ともに〈者〉を主に使っており、〈は〉の例は4例(「〈は〉しめ」(8表6行)、「〈は〉なはた」(65表7行)、「〈は〉らす」(71裏1行)、「はなくは〉た」(65表7行))のみで少ない。ハ音に主に〈者〉を使う傾向は、今野真二(1995)調査の『落葉集・、久保田篤(1994)調査の近世整版本でも同じである。

バ音の字体の使い分けを調べると、結果は以下ようになる。

バ音：語頭一〈者〉37例、〈は〉2例
非語頭一〈者〉46例、〈は〉10例
助詞一〈者〉100例、〈は〉3例、〈ハ〉35例

バ音は、上記の結果をみると、〈盤〉をのぞいて、〈者〉〈は〉〈ハ〉が使われる。特にバ音は、語頭、非語頭ともに〈者〉を主に使い、助詞は〈者〉〈ハ〉を主に使っている。バ音に〈は〉が使われた例は、語頭に「〈は〉うちすも」1例、「〈ハ〉”うちすも」1例、非語頭には「こと〈は〉”」5例、「こと〈は〉」4例、「およ〈は〉”ず」1例、助詞「ば」に3例が使われている。

バ音に主に〈者〉を使い、助詞は〈者〉〈ハ〉を主に使う傾向は、今野真二(1995)調査の『落葉集・と久保田篤(1994)調査の近世整版本にも見られる。

バ音の字体の使い分けを調べると、結果は以下ようになる。

バ音：語頭一〈者〉69例
非語頭一〈者〉6例

パ音は〈者〉のみが使われ、大部分本語の例である。非語頭に唯一に「もつ〈者〉ら」が1例見られる。パ音を〈者〉に使う傾向は、今野真二(1995)調査の『落葉集・と久保田篤(1994)調査の近世整版本と同一である。

3. 1. 6 〈遍〉と〈へ〉

『吉利支丹心得書・に使われた仮名「へ」の字体〈遍〉〈へ〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈遍〉61例(語頭42例、非語頭19例、助詞0例)

〈へ〉72例(語頭5例、非語頭55例、助詞12例)

〈遍〉の例は、語頭使用が非語頭に比べて優勢である。その実例は以下のとおりである。

〈遍〉の語頭の例

和語一「〈遍〉き」12例、「〈遍〉し」4例、「〈遍〉からず」4例

漢語一「一〈遍〉んに」1例、「しや〈遍〉つ」1例、「御〈遍〉ん」1例

本語一「〈遍〉いな」7例、「〈遍〉なへんつらんさ」2例、「〈遍〉なりよ」1例、「〈遍〉にてんしや」1例、「〈遍〉やと」2例、「〈遍〉”やと」2例、「〈遍〉るそうな」1例、「〈遍〉れなりよ」2例、「〈遍〉れにいしま」1例

〈遍〉の非語頭の例

本語一「いん〈遍〉るの」7例、「こん〈遍〉そる」2例、「さる〈遍〉れしひな」2例、「さる〈遍〉れちひな」1例、「さんたいざ〈遍〉”る」1例、「せすた〈遍〉りや」1例、「てんぼらる〈遍〉いな」1例、「へな〈遍〉つらんさ」1例、「ほろ〈遍〉いた」3例

上記の〈遍〉の例をみると、語頭、非語頭ともに本語の例が多いことが目立つ。和語の語頭の場合、すべてが「べし」「べき」「べからず」の例

であって特徴的である。〈遍〉の非語頭の例は19例すべて「本語」である。この本語を別扱いするなら、〈遍〉は、和語や漢語の中で語頭専用と言えるだろう。

〈へ〉は、語頭より非語頭の例が優勢である。以下にその実例を示す。

〈へ〉の語頭の例

和語一「〈遍〉き」1例、「〈遍〉し」2例

本語一「〈遍〉いな」2例

〈へ〉の非語頭の例

和語一「玉〈へ〉」8例、「たま〈へ〉」2例、「引か〈へ〉」1例、「あた
〈へ〉」11例、「い〈へ〉」1例、「いにし〈へ〉」1例、「い〈へ〉
共」1例、「い〈へ〉とも」1例、「おし〈へ〉」5例、「かな
〈へ〉」3例、「か〈へ〉りみ」1例、「きり〈へ〉」1例、「す
〈へ〉」て」1例、「そ〈へ〉」1例、「たと〈へ〉は」2例、「つ
か〈へ〉」1例、「なから〈へ〉」1例、「ま見〈へ〉」1例、「ゆ
〈へ〉」3例、「よみか〈へ〉り」1例、「よみが〈へ〉り」1例、
「よみか〈へ〉る」1例、「わら〈へ〉」て」1例

本語一「あ〈へ〉まりや」3例、「あ〈へ〉」て」まりや」1例、「へな〈へ〉
んつらんさ」1例

〈へ〉の助詞の例： 方向の助詞「へ」11例、「さ〈へ〉」1例

〈へ〉の例をみると、語頭は、「べし」2例、「べき」1例、「ぺいな」2例のみでほとんど非語頭に使われている。

以上の結果から、『吉利支丹心得書』において〈遍〉は語頭、〈へ〉は非語頭という傾向があったと言える。この傾向は、今野真二(1996)調査の『落葉集』でも同一である。

特に「べし」類に〈遍〉の字体が多く使われる傾向は、今野真二(1996)調査の『落葉集』でも、久保田篤(1994)調査の近世整版本でも見られる。

3. 1. 7 〈三〉と〈み〉

『吉利支丹心得書・』に使われた仮名「み」の字体〈三〉〈み〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈三〉36例(語頭1例、非語頭33例、助詞2例)

〈み〉6例(語頭3例、非語頭3例)

〈三〉の実例をみると、「〈三〉な」1例を除くと、すべてが非語頭に使われる。また、助詞「のみ」の2例は〈三〉の字体のみを使う特徴を見せている。

〈み〉の例は、語頭(「〈み〉たり」2例、「〈み〉ちゝゝて」1例)、非語頭(「よくみ」かへる」2例、「こるぼ〈み〉じちこ」1例)で、位置による使い分けは認められない。今野真二(1996)調査の『落葉集・が〈み〉」を語頭専用に行っていることと傾向が異なる。

また、久保田篤(1994)調査の近世整版本では〈三〉と〈み〉の位置による使い分けが見られないというが、『吉利支丹心得書・』では〈三〉が主に非語頭に使われるので、傾向が異なると言える。

3. 2 同字母異字体の場合

3. 2. 1 〈於1〉と〈於2〉

『吉利支丹心得書・』に使われた仮名「お」の字体〈於1〉〈於2〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈於1〉73例(語頭73例、非語頭0例)

〈於2〉47例(語頭47例、非語頭0例)

〈於1〉と〈於2〉の例は、ともに語頭にのみ使われ、仮名の使い分けが見られない。このように両字体の使い分けが認められないことは、久保田篤(1994)調査の近世整版本でも同一である。

3. 2. 2 〈止1〉と〈止2〉

『吉利支丹心得書・に使われた仮名「と」の字体〈止1〉〈止2〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈止1〉60例(語頭42例、非語頭11例、助詞7例)

〈止2〉250例(語頭22例、非語頭108例、助詞120例)

〈止1〉は非語頭より語頭の例が優勢である。その実例を示すと以下のとおりである。

〈止1〉の語頭の例

和語一「〈止1〉か」9例、「〈止1〉が」16例、「〈止1〉き」3例、「〈止1〉なふる」7例、「〈止1〉のふる」3例、「〈止1〉むらい」1例

漢語一「事〈止1〉う」1例

本語一「〈止1〉」うねす」1例、「〈止1〉」みんご」1例

〈止1〉の非語頭の例

和語一「を〈止1〉し」1例

本語一「あほうすく止1」ろ」1例、「かく止1」うりか」1例、「させ
るく止1」うて」2例、「ふるかく止1」うりよ」4例、「ぶ
るかく止1」うりよ」2例

〈止1〉の助詞の例：助詞「と」：7例

上記の〈止1〉の非語頭の例をみると、本語が10例で大部分を占め、和語は「をく止1」し」1例のみである。この本語を別扱いするなら、非語頭は「をく止1」し」1例と助詞7例しか残らないので、〈止1〉は語頭専用であると言えるだろう。この傾向は、久保田篤(1994)調査の近世整版本の『可笑記・(寛永11年九行本)』にも、矢田勉(1996)調査の近世前期の咄本『軽口御前男・(元禄16年(1700)刊)』にも見られるという。

〈止2〉の実例を調べると、結果は以下のとおりになる。

〈止2〉の語頭の例

和語一「おもひ〈止2〉り」1例、「おもひ〈止2〉る」1例、「〈止2〉き」9例、「〈止2〉が」4例、「〈止2〉か」1例、「〈止2〉ころ」1例、「〈止2〉なふる」2例、「〈止2〉もから」1例
漢語一「御き〈止2〉く」1例、「御ぜん〈止2〉く」1例

〈止2〉の非語頭の例

和語一「御こ〈止2〉ば」2例、「御ひ〈止2〉り」1例、「なん〈止2〉」1例、「なん〈止2〉」1例、「なく〈止2〉」2例、「なく〈止2〉」2例、「あく〈止2〉」1例、「かた〈止2〉る」1例、「こく〈止2〉」3例、「こく〈止2〉く」6例、「ごく〈止2〉く」6例、「こく〈止2〉く」2例、「こく〈止2〉は」3例、「こく〈止2〉ば」3例、「こく〈止2〉わり」1例、「たつ〈止2〉き」4例、「たつ〈止2〉まれ」1例、「たつ〈止2〉み」2例、「たく〈止2〉ふる」1例、「たく〈止2〉へは」2例、「つく〈止2〉むる」3例、「つく〈止2〉め」2例、「ほく〈止2〉」3例、「ほく〈止2〉」1例、「ほく〈止2〉こし」1例、「まこ〈止2〉」1例、「もく〈止2〉めん」1例、「やく〈止2〉」1例、「やく〈止2〉され」1例、
本語一「あほうすく〈止2〉ろ」1例、「あほすく〈止2〉ろ」1例、「かそせるはあく〈止2〉」1例、「かく〈止2〉うりか」3例、「きりし〈止2〉」1例、「けれ〈止2〉」2例、「けれ〈止2〉」2例、「こる〈止2〉ん」1例、「さからめん〈止2〉」2例、「さん〈止2〉」6例、「さん〈止2〉すたち」15例、「すひりつさん〈止2〉」7例、「ふるかく〈止2〉うりよ」2例、「へやく〈止2〉」2例、「べやく〈止2〉」2例、「ぼしよぴらく〈止2〉」1例

〈止2〉の助詞の例：助詞「と」：120例

上記の実例の中から、〈止2〉は、非語頭に本語の例を含んでいるにもかかわらず、非語頭の例が語頭の例より圧倒的に優勢である。特に助詞「と」は〈止1〉よりは〈止2〉を主に使っていることが分かる。

3. 2. 3 〈毛1〉と〈毛2〉

『吉利支丹心得書・』に使われた仮名「も」の字体〈毛1〉〈毛2〉を位置別にみると、以下のような結果である。

〈毛1〉43例(語頭6例、非語頭4例、助詞33例)

〈毛2〉35例(語頭20例、非語頭15例、助詞0例)

〈毛1〉〈毛2〉の両字体ともに、位置による使い分けは見られない。しかし、〈毛1〉は助詞「も」の専用として使われる特徴を見せる。

4. おわりに

いままで、キリシタン文字社会の特徴をさぐる意味で、きりしたん文献の一つである写本『吉利支丹心得書・』の仮名の用字法の特徴を考察してきた。それをまとめると以下のとおりである。

まず、字体の面からみると、『吉利支丹心得書・』の仮名字体は75で、和字文のなかでも字体がかなり収斂された馬琴本群(平均82.7字)と草双紙類(平均70.6字)の間に属することが分かった。

次に、仮名字母の面からみると、『吉利支丹心得書・』は68字母で、キリシタン版国字本の中でもっとも収斂された前期本の字母数に近かった。また、キリシタン版国字本の共通字母と比較しても、一部の字母を除いて多くの部分が一致している傾向をみせていた。

仮名の用字法として位置による使い分けをみると、語頭専用として〈加〉〈志〉〈多2〉〈遍〉〈止1〉が、非語頭専用として〈し〉〈多1〉〈ハ〉〈へ〉が、助詞専用として〈止2〉〈毛1〉が使われた。さらに、仮名「は」は、ワ音を主に〈ハ〉で一部〈盤〉、ハ音を主に〈者〉で一部〈は〉、バ音を主に〈者〉と〈ハ〉で一部〈は〉、パ音を〈者〉にする音による仮名の使い分けをしていた。

このような用字法は、一部を除いて、近世の仮名草子整版本や『落葉集・』の用字法と多くの部分で似ていた。すなわち、写本である『吉

利支丹心得書・の仮名の用字法が、当時特別な用字法ではなかったということである。

しかし、残された課題も多い。たとえば、『吉利支丹心得書・にのみ特徴的にあらわれる仮名の用字法もあったが、それが『吉利支丹心得書・のみの特徴なのか、他ジャンルの用字法にもあるものなのかは、より多くの調査が必要である。また、従来行われてきた文献全体の字体調査より、従来区別があると言われてきた異字体を選んで、ある時代からくんだりながら、異字体別の調査をすすめる方法も必要であると思われる。

参考文献

- 海老沢有道校註(1993)「吉利支丹心得書」『キリシタン研究』第30輯、教文館、pp.177-219.
- 久保田篤(1994)「仮名草子整版本における仮名の用法(上)」『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』第27号、茨城大学人文学部、pp.1-19.
- (1995)「仮名草子整版本における仮名の用法(下)」『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』第28号、茨城大学人文学部、pp.41-59.
- 今野真二(1995)「仮名文字遣いからみら『落葉集・一は』『わ』の場合」『国文学研究』115集、早稲田大学国文学会、pp.108-119.
- (1996)「『落葉集・の仮名文字遣い—「か」「た」「に」「へ」「み」に関して—」『国語文字史の研究 三』和泉書院、pp.119-135.
- 珍書大観 吉利支丹叢書(1928)『吉利支丹心得書 上冊』大阪毎日新聞社、pp.1-82、pp.83-144.
- 浜田啓介(1979)「板行の仮名字体—その収斂的傾向について—」『国語学』118輯、国語学会、pp.1-10.
- 福島邦道(1973)『キリシタン資料と国語研究』笠間書院、p.68.
- 矢田勉(1996)「異体がな使い分けの衰退—トの仮名の場合—」『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院、pp.439-457.
- 鄭炫赫(1998)「キリシタン文献の仮名文字の用法—《は》・《わ》の場合—」『国語学研究と資料』第22号、国語学研究と資料の会、pp.1-14.
- (2007)「キリシタン版国字本の文字・表記に関する研究」早稲田大学大学院博士学位請求論文、pp.1-228.

ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ん	わ ワ	ら ラ	や ヤ	ま マ	は ハ	な ナ	た タ	さ サ	か カ	あ ア
踊り	あ	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
い く	あ ア	り リ		み ミ	ひ ヒ	に ニ	ち チ	し シ	き キ	い イ
		る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
		る ル	ゆ ユ	む ム	ふ フ	ぬ ヌ	つ ツ	す ス	く ク	う ウ
ゑ	れ	江	め	へ	ね	て	せ	け	え	
え エ	れ レ		め メ	へ ヘ	ね ネ	て テ	せ セ	け ケ	え エ	
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	
を ヲ	ろ ロ	よ ヨ	も モ	ほ ホ	の ノ	と ト	そ ソ	こ コ	お オ	

성 명(한 글) : 정 현 혁

(한 자) : 鄭 炫 赫

(영 문) : Jung, Hyeon-Hyeog

논문영어제목 : Usage of Kana in "KIRISITAN KOKOROEAGAKI"

소 속 : 사이버한국외국어대학교 일본어학부 조교수

E-mail : junghh3@naver.com

투 고 일 : 2013년 12월 27일

심사개시일 : 2014년 1월 13일

심사완료일 : 2014년 2월 4일